

ヒロシマ原爆展

ヒロシマ原爆展は、広島市との共催で開催しました。被爆者の遺品や写真パネル、被爆者が描いた絵の展示に加え、折り鶴コーナー、平和へのメッセージコーナーなどを設置しました。また、期間中には、開催記念講演会、被爆体験証言会、被爆体験記朗読会を開催しました。

- 期間：8月19日（日）～26日（日）＜休館日除く＞
- 場所：市民センター3階展示場
- 展示内容：被爆資料及び原爆被災写真等のパネル展示（被爆資料20点、パネル34点、原爆の絵32点、子ども用ポスター17点）
図書閲覧コーナー、折り鶴コーナー
来場者による平和へのメッセージコーナー



被爆資料展示



来場者の折った折り鶴



来場者による平和へのメッセージ

ヒロシマ原爆展展示資料

- 1 三輪車，鉄かぶと（ともに複製）（^{てつたに}鍍谷信男氏寄贈・広島平和記念資料館提供）爆心地から1, 500m 東白島町

^{てつたに}鍍谷伸一ちゃん（当時3歳11か月）は、三輪車で遊ぶのが大好きでした。あの日の朝も、自宅前で遊んでいました。すると突然、閃光が走り、三輪車とともに熱線で焼かれた伸一ちゃんは全身に火傷を負い、「水、水・・・」とうめきながらその夜、亡くなりました。たった3歳の子を一人お墓に入れてもさびしがるだろうと思った父親の信男さんは、死んでからも遊べるようにと伸一ちゃんの亡骸に鉄かぶとをかぶせ、三輪車と一緒に自宅の裏庭に埋めました。

40年後の1985年（昭和60年）の夏、信男さんは、伸一ちゃんの遺骨を庭から掘り出して、お墓に納めました。遊び相手だった三輪車と鉄かぶとは、平和記念資料館に寄贈されました。



- 2 縫い針の^{ようゆうかい}熔融塊（複製）



これは高熱火災にあった縫い針です。原爆のさく裂と同時に放射された強烈な熱線により、市内中心部の家屋が自然発火し、続いて市内のいたるところで、火の手があがりました。爆心地から半径2km以内の地域はことごとく消失し、すべてのものが異常な高熱火災により溶けて、まるで溶岩のようにあたりを埋め尽くしました。

3 変形したビール瓶 (寺岡たね子氏寄贈・広島平和記念資料館提供)

爆心地から700m 十日市町



寺岡源助さん(当時53歳)は、自宅で被爆しました。被爆直前の8月3日、妻のヨシさんたちの疎開先を訪ねて「自分も近いうちに疎開するから」と言ったのが源助さんとの最後の別れになりました。自宅の焼け跡からは何も見つかりませんでした。大阪の勤務先から戻った息子の秀夫さんが、9月に焼け跡を掘ったところ、ようやく源助さんの遺骨と遺品などが見つかりました。このビール瓶は、12月頃に自宅の焼け跡から掘り出したものです。

4 水筒 (山本邦義氏寄贈・広島平和記念資料館提供)

爆心地から1,100m 天満町

山本邦義さんの父親の山本次八さんは、天満町の電停で被爆し、首に火傷を負いました。この水筒は、熱線によって外側が焦げています。



- 5 体内から取り出されたガラス片（深井久子氏寄贈・広島平和記念資料館提供）爆心地から1,400m 横川町一丁目



安田高等女学校4年生だった深井久子さん（当時16歳）は、学徒動員^{※1}先の工場で被爆しました。倒れた建物の下敷きになり、なんとか逃げることはできたものの、強烈な爆風によって多くのガラス片が体に突き刺さりました。このガラス片は、1968年（昭和43年）に左の頬から取り出されたものです。

- 6 眼鏡（複製）（佐伯敏子氏寄贈・広島平和記念資料館提供）
爆心地から1,000m 広瀬元町



佐伯敏子さんの母親の茂曾路モトさん（当時54歳）は、自宅で被爆し、行方不明となりました。1か月後に焼け跡から、いつもかけていたこの眼鏡とともに、遺体が見つかりました。

7 産着（田中晴美氏寄贈・広島平和記念資料館提供）

爆心地から1, 700m 白島東中町

田中晴美さん（生後3日）は、両親とともに自宅で被爆しました。自宅は倒壊しましたが、誕生祝いに来ていた近所の女性にとっさに抱いて庇^{かば}われたため、ガラス片は浴びたものの奇跡的に無傷でした。父・敬一さん（当時57歳）、母・律子さん（当時35歳）も共に無事でしたが、倒壊した家の下敷になった敬一さんは、腰の骨を折る重傷でした。そのケガにもかかわらず、敬一さんは勤務先を心配して市内を歩き回りました。その後、一家は律子さんの母親のいた京都へ向かい、約5年を過ごしました。この産着は被爆当時のもので、律子さんが大切に保管していました。



8 定期入れ（複製）（船附小子氏寄贈・広島平和記念資料館提供）

爆心地から1, 700m 横川町三丁目



崇徳中学校3年生だった木島和雄さん（当時15歳）は、学徒動員先の工場へ向かう途中、横川駅で被爆しました。警察官の西倉二さんが、倒壊した駅の梁に片足が挟まり動けなくなった和雄さんを発見し、救出しようとしたのですが、駅が燃え出し、炎が迫ってきました。西さんが「助けられない、許してくれ」と

言うと、和雄さんは「ありがとうございます。これを家のものに渡してください」と定期入れを渡しました。父親の倉吉さんは、翌日から毎日、和雄さんを捜し歩きましたが、発見することができず、被爆から20日後頃、西さんから届けられたこの定期入れによって、和雄さんの死を確認しました。

9 形見のビー玉 (複製) (松田雪美氏寄贈・広島平和記念資料館提供)
爆心地から1,250m 宝町

広島市立第一工業学校3年生だった松田敏彦さん(当時15歳)は、動員先の工場へ向かう途中で被爆しました。母親の雪美さんが必死に捜しましたが発見できず、形見にと自宅の焼け跡でビー玉を拾いました。ところが、敏彦さんは8日に大やけどを負いながらも帰宅し、雪美さんは形見のことなど考えた自分を反省



するほど安心しましたが、8月21日に看病の甲斐なく亡くなりました。ビー玉は本当の形見となりました。

10 死亡診断書 (複製) (佐々木伸治氏寄贈・広島平和記念資料館提供)



佐々木英夫さんは、爆心地から950m離れた八丁堀にあった勤務先の広島県食糧営団^{※2}本部で、朝礼直後に被爆しました。金庫を背に座っていたため、顔に数センチの怪我を負っただけでした。英夫さんは自力で伯母宅へ避難し、自宅で被爆して避難してきた息子の宏治さん、伸治さんと当日、再会しました。あまり怪我もなかった英夫さんでしたが、10日頃から斑点が出始め、甲状腺が腫れ、髪が抜けるなどの症状が出て、8月29日に亡くなりました。

1 1 ^{いぎょう}異形のツメ（高橋昭博氏寄贈・広島平和記念資料館提供）

爆心地から 1, 4 0 0 m 中広町



広島市立中学校 2 年生だった高橋昭博さん（当時 1 4 歳）は、朝礼のため集まっていた校庭で被爆しました。一瞬のうちに真っ暗闇になり、気が付くと爆風で 1 0 m ほど吹き飛ばされていました。制服はボロボロに焼かれ、後頭部から背中、両手両足に火傷を負い、皮膚が垂れ下がりました。また、右手人差し指のツメの根元にはガラス片が深く食い込んでいました。昭博さんは自宅にたどり着いたとたん意識を失い、約 3 週間の昏睡の後、奇跡的に命を取り留めましたが、右肘と右手の指は動かないまま、人差し指からは、異形のツメが生え続けました。ツメは厚くて硬いので、つめ切りでは切れず 2 ～ 3 年たって 2 c m ぐらいに伸びたところで亀裂が入り、ポロッと自然に落ちました。

1 2 遺骨代わりに瓦片（浜田平太郎氏寄贈・広島平和記念資料館提供）

爆心地から 2 0 0 m 猿楽町



浜田照代さん（当時 2 1 歳）は、勤務先の日本興業銀行広島支店で被爆しました。8 日、母親のかとさんは、職場の焼け跡で、黒焦げになった 7 人の遺体を見つけました。かとさんは、照代さんを確認することができず、その場にあったこの瓦片を持ち帰り、遺骨代わりに大切に保存していました。かとさんの次女で県立広島第一高等女学校 1 年生だった孝子さん（当時 1 2 歳）も、建物疎開^{*3}作業現場で被爆し、翌 7 日早朝に亡くなり、かとさんは 2 人の娘を原爆で亡くしました。

1 3 弁当箱 (複製) (折免^{おりめん}シゲコ氏寄贈・広島平和記念資料館提供)

爆心地から600m 中島新町

県立広島第二中学校1年生だった折免^{おりめん}滋さん(当時13歳)は、建物疎開作業現場で被爆し、死亡しました。母親のシゲコさんは、焦土となった街を必死で捜索しましたが、なかなか発見できず、ようやく8月9日早朝、弁当箱をおなかの下に抱きかかえるような姿の遺体を見つけました。滋さんは、シゲコさんの



ために山や竹やぶを開墾して畑を作っており、その日のお弁当の中身は、その畑から初めて収穫した作物で作ったおかずで、喜んで持って行きました。食べることのできなかつたお弁当は真っ黒に焦げていました。

1 4 校章 (松野 (旧姓 木村) 妙子氏寄贈・広島平和記念資料館提供)

寄贈者の妹・木村幹代さん(当時13歳)は、県立広島第一高等女学校1年生で動員学徒として土橋付近で建物疎開作業中に被爆、全身が真っ黒に焼けただれる大やけどを負いながらも、力を振り絞って己斐^{こい}国民学校まで逃れました。ここで偶然姉の友人を見つけた幹代さんは、自宅への伝言を頼み、迎えに来た父親の一美さんとようやく自宅へ帰ることが



ができました。幹代さんは、自宅へ帰ることができたのが何より嬉しいらしく、泣きもせず、苦しいとも言わず、被爆時の状況をつぶさに語りました。家族が懸命に看病しましたが、幹代さんは、翌7日の朝、半分体を起こして東の方へ向いて手をあわせ亡くなりました。

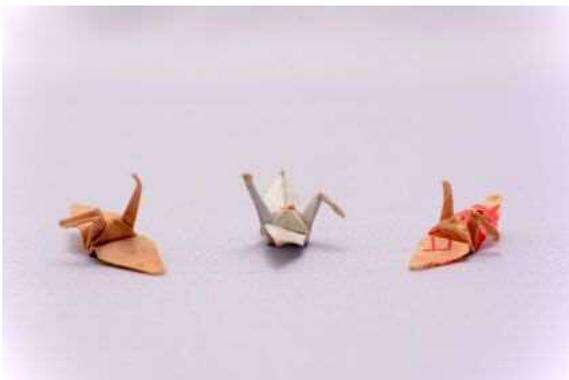
1 5 バックル (山田紀子氏寄贈・広島平和記念資料館提供)

爆心地から600m 中島新町

1年2学級の興津正和さん(当時12歳)は、8月6日の朝父の恒一さん(当時41歳)の代わりにかぼちやの交配をし、「行って参ります」と敬礼をして元気に出かけたのが、家族が見た最後の姿となりました。恒一さんと母親のみふじさん(当時31歳)は、当日から必死で正和さんを捜しましたが、見つけることができませんでした。被爆から1か月後、市役所から似島で火葬された正和さんの遺品と遺骨を受け取りました。このバックルは、物資不足の時代、新しいバックルを入手できず、近所の人からもらい、大事にしていたものでした。

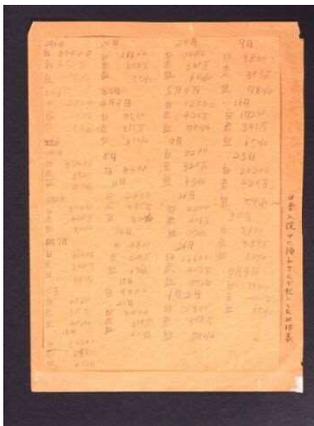


1 6 禎子さんが残した折り鶴 (佐々木繁夫氏、佐々木雅弘氏寄贈・広島平和記念資料館提供)



佐々木禎子さんは2歳の時に爆心地から約1.6km離れた自宅で被爆しましたが、怪我もなく、その後運動の得意な元気な少女に成長しました。しかし10年後の小学校6年生の秋に突然、白血病を発症し、翌年2月に入院しました。千羽鶴がお見舞いに贈られたことをきっかけに鶴を千羽折ると願いが叶うという言い伝えを信じ、折り続けましたが、願いもむなしく亡くなりました。死後、禎子さんをはじめ原爆で亡くなった子どもたちの慰霊と平和を守るための記念像(「原爆の子の像」)がつけられました。現在では、折り鶴は、禎子さんの物語とともに平和の象徴として世界に広がっています。

1 7 病床記録 (複製) (佐々木繁夫氏寄贈・広島平和記念資料館提供)



記録は7月初旬で終わっています。この頃、同じ小児科病棟の少女が白血病で亡くなり、禎子さんは「今度は私の番ね」と泣きながら弱音を吐くようになりました。禎子さんが書き留めた記録は、禎子さんが亡くなったあと、ベッドの下から見つかりました。家族も友達も禎子さんに病名を告げたことはありませんでしたが、血液の重い病気だと気づいていたのだと思われます。ここに書かれている「白、赤、血」とはそれぞれ「白血球数、赤血球数、^{けっしきそりょう}血色素量」を省略したものです。

1 8 熱線を浴びた瓦 (触れる資料) 1 9 平瓦 (触れる資料)



- ※1 学徒動員 (がくとどういん) …第2次世界大戦中に、国内の労働力不足を補うため、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食糧増産に動員されたこと。
- ※2 食糧営団 (しょくりょうえいだん) …戦時下において、食糧を管理統制するため設立され、米や麦など主要な食糧の配給や貯蔵を行った。
- ※3 建物疎開 (たてもものそかい) …空襲により火災が周辺に広がるのを防ぐために、あらかじめ建物を取りこわして、防火地帯を作ること。

ヒロシマ原爆展オープニングセレモニー・記念講演会

渡部陽一さん講演会『戦場からのメッセージをあなたに』 ～ファインダー越しに見た命の現場～

「ヒロシマ原爆展」の開催を記念して、オープニングセレモニー及び記念講演会を行いました。

オープニングセレモニーでは、平成30年度「小学生の描いた平和ポスター展」受賞者の表彰式を行いました。

記念講演会では、戦場カメラマン・ジャーナリストの渡部陽一さんに、学生時代から世界各地で内戦や紛争の取材を続けてこられた経験を基に、いま世界の紛争地域で起こっていることや戦地で暮らす人々の生活など、ファインダー越しに見た命の現場について語っていただきました。

■日時：8月19日（日）13時30分～15時30分

■会場：ルナ・ホール

■内容：オープニングセレモニー

（小学生の描いた平和ポスター展受賞者表彰式）

渡部陽一さんによる記念講演会



渡部陽一さん（戦場カメラマン）からのメッセージ

『戦争の犠牲者はいつも子どもたち』。

これがいかなる戦争であっても変えることのできない現実でありました。世界で戦争が続く限り、紛争地に立たされる子どもたちの声をたくさんの方に届けたいと思っています。

被爆体験証言会

- 日時：8月25日（土）①10時～11時
②13時15分～14時15分
8月26日（日）①10時～11時
- 場所：市民センター301室
- 証言者：山本玲子さん（広島市在住）

この証言は、平成30年8月25日（土）、26日（日）に開催した被爆体験証言会の内容を文章にしたものです。

みなさん、こんにちは。山本玲子と申します。よろしくお願ひします。

私が生まれる前の年の1937年（昭和12年）から日中戦争^{※1}が始まり、1945年（昭和20年）8月15日に敗戦を迎えました。だから、私は生まれてから国民学校^{※2}1年生の夏までずっと戦争の中で大きくなりました。

私の家は、爆心地から4.1キロぐらい離れていたのだから、家が倒れたり、大やけどをしたりするということはありませんでしたが多くの方が逃げてこられ、焼野原になった広島市街を見ました。

その頃、私の父は戦争に行っていないのでした。家族は、祖父母と、母と、3歳上の兄と、私と、4歳の妹の6人家族でした。祖父は農業をしていましたので、私の家には、広い土間や納屋がありました。戦争が激しくなると、

広島には陸軍の基地がありましたので、その疎開物資が私の家だけでなく、農家の家に運ばれてきて、大きな箱が天井まで積み上げられました。中にはむしろに包まれた大きな物もありました。祖父はその周りに綱をはりめぐらして、兄と私を呼んで「ここで遊んではいけない、これらの物にちょっとでも触ったりしてはいけないぞ」と兄や私に言い聞かせました。大きな箱の中には大きなローソクなどが入っていて、むしろで包まれた大きな包みの中には大鍋や大釜、作



（原子爆弾被災状況広島市街俯瞰図）

業用のスコップが入っているということでしたが、もちろん中を見たわけでは
ありません。

農家だったので、米や麦を作っていました。そのほとんどを国へ供出する
ので、食べる物は、麦の多いおかゆやみそ汁に、その頃はメリケン粉と言っ
ていたのですが、小麦のくずを引いたものを丸めて入れた団子汁ばかりでした。

そして戦争が長引いてくると、日本は金属類が不足してきました。祖母が仏
さんの飾り物や鐘、湯たんぽ、鍋、釜を部屋に並べて、悲しそうな顔をしてい
たのを覚えています。

空襲警報が始まると、私の家の近くには、段々畑（石垣を積んではまた畑に
した所）がありましたが、その石垣の一部を崩して、各家で横穴式の防空壕^{※3}
を掘って、空襲警報が出ると、兄や私や妹はその中に逃げ込んで、その中で震
えていました。広島市などの石垣などがない所に家のある人は畳を上げて、畳
の下の床の下に穴を掘って防空壕にしたそうです。

1943年（昭和18年）、村出身の飛行兵のおじさんが、今の茨城県の土
浦の飛行場から鹿児島県の飛行場へ移動することになりましたが、その時に村
の上を旋回しました。村の男の子は新聞紙に日の丸を書いて竹竿につけて、屋
根に上って、おじさんが通る時間に日の丸の旗を振りました。私達は庭先に出
て、飛行機が来たら手を振りました。おじさんが乗っていたのは、小さな飛行
機で、家の屋根すれすれに3回ほど回って飛んで行ったので、おじさんの姿も
かすかに見えました。

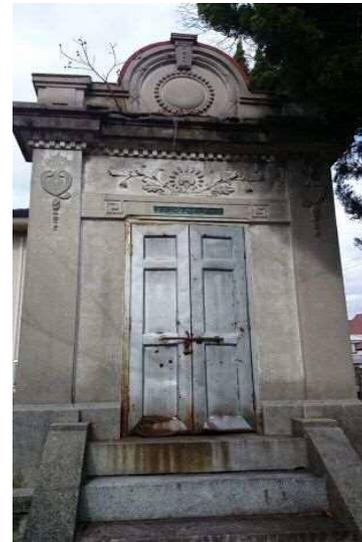
後から聞いた話ですが、おじさんが鹿児島に行けば二度と村に帰って来られ
ないだろうと思って、家族が上司の人に、鹿児島に行くときに「ちょっとだけ
進路を逸れて村の上を飛ばしてください」と頼んだそうです。上司の人が「め
ったにないことですがけれど」とおじさんの願いを聞き入れてくれたというこ
とでした。おじさんには3人の子どもがいましたが、二度と村に帰って来られま
せんでした。

1945年（昭和20年）4月1日、私は長東^{ながつか}国民学校1年生になりました。
桜の花が満開で、入学式にはセーラー服を着ました。そのセーラー服は親戚か
らもらった古いものを母が縫い直してくれたものです。赤いランドセルは、厚
紙を折り曲げて作られたものですが、とても嬉しかったのを覚えています。

爆心地から4.1キロ離れた長東国民学校の周りは、田んぼや竹藪もあって、
のどかな生活を送っていました。その頃、広島市内の国民学校では、3年生以
上は、空襲の被害を避けるため、地方の親類の家に身を寄せる縁故疎開に行っ
て生活をしました。縁故疎開ができない児童は、学校ごとに集団でまとまって
田舎のお寺や学校に親元を離れて疎開をして生活し、学校へ通いました。私の
通っている学校は、安佐郡長東村にあったため、疎開はありませんでした。

学校へは家から歩いて20分位かかりましたが、毎朝、兄や近所の友達といっしょに元気よく通いました。その頃、教科書以外に必ず防空頭巾^{ずきん}*4というものを持って通っていました。大人たちも、街のほうや広島市に働きに行くときなどは、着物をほどいた大きな防空頭巾を必ず持って行っていました。

校門を入ると、石造りの奉安殿というものがありました。その中には天皇と皇后の写真（御真影）と校長先生が入学式や卒業式に読まれる教育勅語^{ちよくご}*5が巻物になって桐の箱に入れて納められていました。学校の登下校時には、必ずお辞儀をしないとダメです。遊ぶ時もその前を通るときはお辞儀をしないとダメです。それは児童だけでなく、学校に来る大人の人や先生も同じようでした。



(奉安殿)

学校の運動場には、防空壕の穴が掘られました。箱型の防空壕だったので、天井に覆い^{おお}がありません。

空襲警報のサイレンが鳴ると児童は両手で耳と目を押さえてその防空壕に駆け込むのですが、空からはまる見えでした。

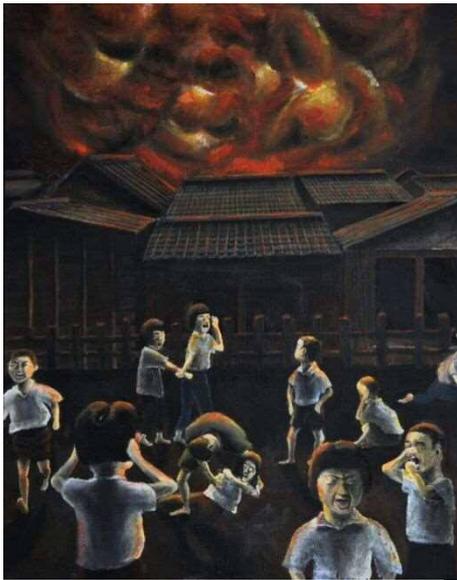
小学校1年生でも戦争に協力していました。家に帰ると毎日のように、土手や道のほうに行って、ヨモギを摘むんです。ヨモギは今も雑草としてたくさん生えていますが、これを干して一週間分まとめて学校に持って行っていました。

彼岸花の球根もスコップで掘って乾かして学校にまとめて持って行っていました。私はこの球根でかぶれたこともあります。これはのりの材料の一部になるということでした。そして、ヨモギは食糧の一部とか、兵隊さんの寝具、枕などの中に一部入れられるということを知っていました。兄たちは、3、4年生になると近くの山に行ってドングリを集めて学校へ持って行っていました。それは食糧の一部になるということでした。



(彼岸花)

大人が山の松の木に斜めに切れ目を入れると松が松脂^{まつやに}を出します。5、6年生になると、それを集めて学校に持って行っていました。それは燃料の一部になるということでした。



（「校庭から見た火の玉」
（制作：堰楽 由理 氏）

1945年（昭和20年）の夏休みは8月10日から20日の予定でした。8月6日は月曜日で、雲一つない暑い朝でした。いつものように学校へ行くと、教室にかばんを置いて、私達は運動場に遊びに出ました。遊んでいると、誰かが「飛行機だ！！」、「B29^{*6}だ！！」と言いました。空を見上げると南の空に2機の飛行機が、朝日を浴びて銀色に輝いてゆっくりと上下に飛んでいました。

私は「ああきれい」と思った瞬間、太陽が落ちたのかと思いました。初めは巻き上がる砂埃^{すなぼこり}が周りを黄色くし、それからだんだんと夕方のように暗くなりました。児童はびっくりしてぶつかったり、逃げ惑^{まど}ったりしました。私もみんなと一緒に逃げました。

少し明るくなったので周りを見ると、私達は、裏門から出て裏門近くの民家の縁側の下にしゃがみ込んでいました。だんだん周りが明るくなると、誰かが「どうしてここに逃げたのだろう」、「学校の防空壕に逃げないといけなかったのに」と言いました。すると「だって空襲警報も何も出なかったもん」と他の人が言いました。

だんだん周りが明るくなったので、上級生が立ち上がって校庭に帰って行きました。校庭に帰ってみると、学校は、瓦が吹き飛んで窓ガラスや窓もめちゃくちゃになっていました。瓦でけがをした児童もたくさんいて、先生は包帯を巻いて治療をするのに忙しくて児童のみんなには声をかけてくれませんでした。

兄が私を見つけて、「玲子、けがはせんかったか」と言って走ってきました。兄も元気そうでした。「兄ちゃんはどこにいたの」と尋ねると、「学校の防空壕へ逃げ込んでいた」と言いました。

しばらくして、教頭先生が運動場の真ん中に元気な子どもを集めて、「みなさん、気を付けて早く家に帰りなさい」と言いました。私は兄と一緒に帰るために正門のほうに歩きましたが、「ランドセルを持っていかないといけない。」と思って引き返して校舎の入口に行きました。すると、廊下の天井が全部落ち



（原爆投下後の学校の様子）

（撮影：米軍 提供：広島平和記念資料館）

ていて校舎には入ることができませんでした。

兄と一緒に学校を出ました。学校の近くには安川という大きな川が流れていたのですが、川のほとりの藁葺きの屋根からは、白い煙が出ていました。帰る途中で、私たちを迎えに来てくれた母と会いました。私は、母を見ると「おかあちゃん、学校へね、爆弾が落ちたんよ」と教えました。すると母は首を強く振って「家もね、めっちゃめっちゃなんだけど、おじいちゃんとおばあちゃんが2人を早く迎えに行行ってやれ、と言ってね」。母は走って来たらしく、肩ではあはあと息をしていました。

私が母に「かばんを持って帰ることができなかった」と言うと、母は兄と私を見て、「けがをせんでよかった、よかった」と何度も言いました。すると、兄が白の半袖シャツを着ていたのですが、腕の上のところを押さえて、「ちょっとやけどしたみたいだ」と言いました。母はびっくりして兄に「何の悪いことしよったん」と聞きました。兄は「校庭で遊んでいると、誰かがB29だ、と言うので空を見上げた瞬間、ピカッと光って、砂嵐に巻き込まれて防空壕へ逃げた」と言いました。母は、いつも手拭いをかぶって仕事をしていたのですが、その時も手拭いをかぶって私たちを迎えに来ていました。その手拭いをとって兄がやけどをしたという腕に巻きつけました。

自宅へ帰る途中に安芸長東^{あきのながつか}という駅があって、その駅のほうを通過して帰るのですが、駅のプラットフォームでは、たくさんの人が電車が来るのを待っていました。そして駅の近くの一軒の民家からは炎がたち昇って、手につけられない状態になっていました。人々は「敵に爆弾を落とされた」、「敵にやられた」と言って、騒いでいました。

家に帰ってみると、一部が2階建てだったのですが、2階はねじれたようになっていました。玄関から台所にもいけないぐらい玄関の戸もひっくり返り、壊れ、窓ガラスや家の中のたんすもひっくり返ってめっちゃめっちゃになっていました。

母は被爆した時に、台所で片づけをしていたそうです。すると青い光に包まれて、いろいろなものが吹き飛んできたので、雷が落ちたと思って、部屋で一人で遊んでいた4歳の妹の名を叫んだそうです。妹は、幸いにタンスに倒れかかっていたふすまの下にいて、けがはしませんでした。

祖父は、田んぼのそばで牛のえさ用の草を刈っていました。突然、後ろから、青い光に包まれて、帽子を飛ばされてびっくりして、地面に両手で腹ばいになったそうです。しばらくは腹ばいになったままでしたが、家はどうなったか、陸軍から預かっている品物はどうなったか心配になって、刈った草も鎌も帽子も投げ出して走って家に帰ったそうです。

祖父が家に帰ってみると、入口の戸が曲がってすぐに入れないので、薪を持

って戸を打ち破って家に入ったそうです。陸軍の預かっている荷物は無事だったので、安心して土間に座り込んだと言いました。

祖母は一人で、水のある田んぼで草取りをしていたそうです。「正面から光とともに、ソフトボールぐらいの火の玉が自分をめがけて飛んできたので、びっくりして尻もちをついたと」言っていました。

近所の人、周りの人も何が何だかさっぱり分からなく、何の情報もないので、近くの山にあった軍の弾薬庫が爆発したのだらうと話し合ったそうです。

母と家に帰っても家には入れないので、私は妹と防空壕へ入ったり、庭から縁側にまわって遊んだりしていました。母と祖母は少しでも家に入れるように家の中を片付けるのに忙しかったのです。

すると、空が曇って黒い雨が降って来ました。私の家は農家だったので、収穫した米や麦を食い荒らすネズミを退治するために、タマという白黒まだらの猫を1匹飼っていました。タマが、雨が降ってきたので、庭に出て行くと、雨に濡れたタマの毛は、白いところも黒くなったんです。私は変な雨だなあと思って、自分も外に出て両手を広げてその雨を受けました。その雨は黒くてねちやっとしていました。今まで見たこともない雨でした。

この“黒い雨”にはたくさんの放射性物質が含まれているということ知ったのは、5年ぐらい経ってからのことでした。広島市では、兵隊さんから、火傷した人が水を飲むとすぐショック死をするから水だけは絶対にあげてはいけないと何度も止められたそうです。のどが渴いた人々は、この“黒い雨”を普通の雨と思って口をあけて飲んだと言います。



「逃げてきた被爆した親子」

(制作：枚村 奈美 氏)

お昼前になると、広島市のほうから、絶えず物が破裂するようなパン、パンという音がして、夜遅くまで続きました。

お昼頃に、私の家に知らないお母さんと子どもがやって来ました。お母さんは、片足は下駄をはいていましたが、片足は裸足でした。

私の母は、5歳ぐらいの女の子が、夏だったから上着は着ないとしても、破れたパンツ1枚だったので、びっくりして、1枚しかない私の服を、この女の子に着せてあげました。そのお母さんは赤ちゃんを抱いていました。

7か月ぐらいの男の子の赤ちゃんでしたが、頭に何か落ちたのか、顔は紫色に腫れて、目は固く閉じていました。もうそのときは息をしていなかったと思います。

お母さんは、「もう広島市はだめです。伴^{とも}という田舎の所に親類がいるので今から行きます」と言い、頭を下げて行かれました。お母さんは、片足は裸足だったので、藁^{わら}で藁草履^{わら}を作ってあげました。私は、自分の1枚しかない服を着て去っていく女の子をいつまでも見つめていました。

私の家は県道からちょっと外れていましたが、たくさんの人が髪をぼうぼうにして、焼け焦げたものをぶら下げて避難してきました。人々は口々に「水をくれ」と言って、道にうずくまったり、元気な人は、畑に入って、トマトやキュウリを食べていたりしていました。1人か2人だったらどうにかなるのですが、列を作って来られると、村の人はもうどうすることもできませんでした。

私が妹と縁側で遊んでいた時、白いステテコだけを履いた大きな男の人が火傷した体に布団を一枚かついで庭に入り、縁側で「水をくれ」と言って倒れこみました。おじさんは、一度縁側に倒れこむと、もう自分では起き上がることもできませんでした。



（「ひどい火傷を負ったおじさん」）

（制作：山野 一真 氏）

母と祖母は、部屋を大急ぎで片付けて、布団におじさんを2人がかりで乗せて部屋に引っ張り込みました。おじさんは、祖父の知り合いの人でした。

おじさんが「水をくれ」と言うので、水を飲ませるのですが、なかなかうまく飲めません。やっともらった水を吐いてしまいます。それは黄色くてとても酸っぱい臭いのするものでした。何かつけようと思っても家には薬も何もありません。天ぷらをする油が少しあったので、それを布につけておじさんの体に塗ろうとしましたが、おじさんの体からは色々なものが垂れ下がっているのので、母が体から下がっている物をはさみで切りました。それは焼けただれた服だけではなく、首や肩の皮膚が一緒になったものでした。何とか切って、おじさんに油をつけたのですが、全身にやけどをしていたので、足りません。キュウリをすって、おじさんの体に貼りつけました。いつの間にか、おじさんの体に黒くなるほどハエがたかっていたので、母は、兄と私に、うちわでおじさんの体からハエを追い払うように言いつけました。おじさんの熱は高くて本当にどうすることもできませんでした。

夕方になって、近所の人々が、長東国民学校が救護所になったと教えてくれました。次の朝、祖父と祖母はおじさんを荷車（大八車）に布団ごと乗せて連れて行きました。結局おじさんは、7日のお昼過ぎに救護所で亡くなりました。

私も後から救護所に行きました。校庭にはあちこちに亡くなった人の遺体が山積みになっていました。祖父は何とかしておじさんを火葬しようとしたのですが、村には1か所しか火葬場がありませんでした。当時、太田川の川原でたくさん遺体を焼いていたので、そこに運んで、藁と木を持って行ってなんとか火葬しました。

その頃になると、近所に逃げて来た人達も次々に亡くなりました。飛行機も飛んで来るし、煙を出して焼くこともできないので、どこの家も、畑の隅に穴を掘ったり、山影に穴を掘ったりして、あまり煙を出さないようにして火葬しました。だから家の周りには、紫色の煙が立ち込めて、何とも言えない匂いが漂っていました。

祖父は、8月の終わり頃、私と兄を連れて、広島市内（横川、中島地区、平塚町）の親戚があった所を回って、焼野原となった広島の街を見ました。祖父が、「何もかも無くなったけれど、川の流れだけは変わらない」と言いました。8月の終わりでも防空壕に焼けた鉄板（トタン）を被せて暮らしている人もいました。

今の平和記念公園の平和記念資料館の近くにおじさんの家がありました。家の周りには、溶けたビンや茶碗が散乱していました。当時、今の公園の辺りには、6つの町がありましたが、跡形もありません。だから天神町のおじさんの家もどこにあったか分からない状態でした。



（原爆ドーム）

（撮影：林 重男氏 提供：広島平和記念資料館）

天神町は、現在の資料館東館のある辺りで、広島で一番賑やかな街だったのです。祖父は「この辺りが天神町のおじさんの家だった」と言って、家から持ってきた線香を立てて、三人で手を合わせて拝みました。

9月1日から私たちの学校は始まりましたが、それまで各学年1クラスだった児童数は、戦後は広島市からの転校生、朝鮮半島、中国からの引揚げ者もいて、教室に入れにくいくらい的人数になりました。だから、廊下を使って勉強をしていました。学校へ行った時にまず先生に言われたことは、「教科書から“へいたいさん”，“日の丸”という字を習字の墨で消しなさい」でした。戦後の暮らしはとても厳しくて、私の家は農家だったので、何とか粗末な物でも食べられたのですが、家が焼かれて親類の3家族が私の家に集まってきたので、14人になり、生活は本当に苦しかったです。だから、にわとりやウサギを飼ったりしました。

秋になると、兄と私は学校から帰ると田んぼに行ってイナゴを取るのが仕事でした。一升ビンと網を持って行って田んぼに行くと、農薬を使っていないの

でイナゴがたくさんいました。そのイナゴを一升ビンに詰めこむのです。いっぱいになると、次の日まで置いて、イナゴは苦しいから汚物を出すんですね。次の日にビンから出して焼いたり、からいりにして食べたりするんですけど、私はどうしても食べることができませんでした。イナゴを食べるといふ食文化は今でも山形県や長野県の一部にはあるそうです。そして学校でお昼のお弁当がある日や授業があるときもみんな学校に弁当を持って行くことはできませんでした。どこの家も、団子汁とかお粥のようなものしか食べるものがなかったので、お昼の1時間を使って食べに帰るんです。家に帰ったからと言って食べるものがたくさんあるわけではありません。私の家でも小さなサツマイモを一つ食べて行ったこともあります。何もない家では何も食べないでまた学校に行っていたようです。

翌年の夏になると、体の悪い人がたくさん出てきました。とにかく柔らかい腕とか腿もものあたりに紫色の斑点が出るんです。そうすると気力がなくなっごろごろして、亡くなるんです。医者に行っても原因が分かりません。そして、薬もありませんでした。だから、今は花が咲いていませんが、どこの家でもドクダミ草を干して、お茶の代わりにして飲んでいました。私の友達も1947年（昭和22年）2月、学校を3日休んだ後亡くなりました。

元気があった私の祖父も、1948年（昭和23年）12月に74歳で急に亡くなりました。その頃は74歳といえばとても長寿だったのですが、祖父は被爆した次の日から広島市内中を歩き回って親戚を探したりしたので、放射線による障害もあったのかもしれませんが。

私自身は被爆者という認識はあまりありませんでした。大きくなって、会社に勤めて、結婚差別に涙したこともあります。私には3人の子どもがいますけれど被爆から25年経った頃、一番下の子がまだ赤ちゃんだったのですが、乳児肝炎という病気になりました。私は、黒い雨などを浴びたからかなあ、と思ったこともありました。今はその子も元気で暮らしています。以上が私の被爆体験のお話です。

次に、原爆の日に、私の家の近所に逃げてきた進君のお話をします。進君は、国民学校5年生で爆心地から2.3キロの所にお母さんと2年生の妹と3人で暮らしていました。お父さんは戦争に行っていないでして。お母さんは、6日、建物疎開作業に動員されていました。建物に焼夷弾が落ちた時に燃え広がらないように建物を壊して防火帯を造る作業です。



(建物疎開)

(作者:濱田 義雄氏 所蔵:広島平和記念資料館)

8月6日も広島を中心部7か所で作業が行われていました。作業には、当時、中学校、女学校は別々の学校でしたが、4、5年生は軍需工場や被服^{しょう}廠（兵隊さんの服などを作ったり直したりする所）に動員されていたので、1、2年生は学校に残って運動場を耕して芋やカボチャなどを作ったりしていました。それから戦争に行って困っている家などに手伝いに行ったりしていて、1945年（昭和20年）には、中学校では授業をほとんどしておらず、交代で後片付けに動員されていました。6日も8、200人ぐらいの生徒が動員されましたが、およそ6、300人が亡くなりました。多くが即死です。

町内会で、交代で動員された進君のお母さんも朝早く出て行きました。進君と妹さんは2人で留守番をしていたのですが、爆心地から2.3キロの距離だったので、原爆が落ちた時に家が潰されました。進君は運よく外に這い出ることができましたが、妹は、梁^{はり}に挟まれて、外に出ることができませんでした。

進君は、必死で妹の周りの瓦をどけて、土もどけて、首から上は外に出せたのですが、そこからは、柱があるから出られないんですね。逃げていく人に、「ここに妹がいるから助けてください」と何度も頼んだそうです。でも呼んでも、誰も振り向いてはくれません。進君は近くにあった大きな棒を持って、妹のいる所の柱に棒を突っ込んで自分の体重を全部かけて何度も動かそうとしましたが、柱は動きませんでした。

そのうちに白い煙が流れてきて、火が近づいて来ました。進君は、「妹が生きたまま焼かれる」と思って、持っていた棒を引き抜いて、妹の頭を思いっきり殴りつけて、夕方泣きながら私の近くの親戚に、「僕は妹を殺した」と言って逃げてきました。

お母さんはどこで亡くなったか分かりません。お父さんは戦死しました。独りぼっちになった進君は、しばらく親戚の家にいましたが、終戦後、大阪の親戚に引き取られました。中学2年生の時、病気で亡くなったと聞きました。

今、広島に慰霊碑がありますが、この中には今まで亡くなった人の帳簿が入っています。広島に落とされた原爆では、その年の12月末までに14万人の方が亡くなられたと推計されています。そして、現在、この中に納められている帳簿の名前は毎年少しずつ増えてきています。31万人以上の名前が書かれた帳簿が入っています。



(原爆死没者慰霊碑)

現在、世界には1万5千発近くの核兵器があります。今の核兵器はミサイルに搭載されると、ボタン1つ押せば、目的地に必ず正確に飛んでいきます。核兵器を作るのも、戦争を始める者も、人間です。このまま戦争をしたり、核兵器を使っていると、自分の国でなくても放射能に汚染されてしまいます。そして、この地球に、人類は住めなくなると思います。日本は幸いに73年間、たくさんの犠牲を出したので戦争をしていません。皆の力で二度と戦争をしないという憲法を国民の力で守ってきました。戦争をして一番犠牲になるのは、一般の市民です。



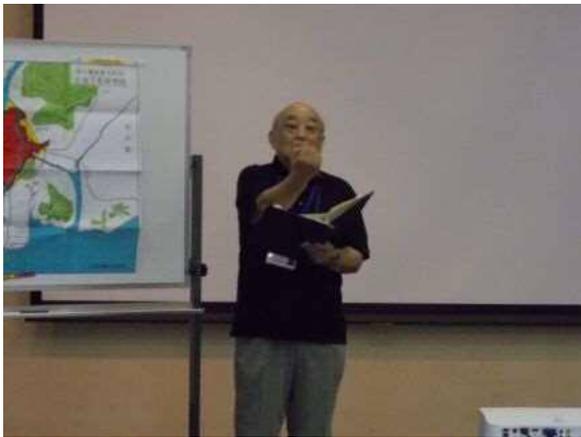
(石室)

平和記念公園の石室に刻まれている、「安らかに眠って下さい。過ちは繰返ませぬから」と刻まれています。主語がない、とか問題になることがあるんですけども、私は、この言葉は平和を願う一人ひとりの言葉だと思います。本当に戦争だけは二度としない、核兵器は使わない。私もそのために、皆様と一緒に、戦争、核兵器には反対していこうと思います。

- ※1 日中戦争（にっちゅうせんそう）…1937年（昭和12年）7月から1945年（昭和20年）8月まで中華民国と大日本帝国の間で行われた戦争。
- ※2 国民学校（こく민がっこう）…1941年（昭和16年）公布の国民学校令により、小学校が国民学校に改められた。初等教育学校で初等科6年、高等科2年の8年となる。1947年（昭和22年）まで存続する。
- ※3 防空壕（ぼうくうごう）…空襲の際に避難するために地中に掘られた穴。
- ※4 防空頭巾（ぼうくうずきん）…戦時中、空襲の際の落下物から頭部を守るためにかぶった綿入りの頭巾。
- ※5 教育勅語（きょういくちよくご）…1890年（明治23年）10月30日に発布された日本の教育の基本方針を示した明治天皇の言葉。1948年（昭和23年）に廃止された。
- ※6 B29…第二次世界大戦中に、ボーイング社が開発した米国の大型爆撃機。

被爆体験記朗読会

- 日時：8月25日（土）①11時15分～12時15分
②14時30分～15時30分
8月26日（日）①11時15分～12時15分
- 場所：市民センター301室
- 朗読：国立広島原爆死没者追悼平和祈念館朗読ボランティア
片山 朗さん、佐藤 千佳砂さん
- 内容：被爆体験記（小田 直子さん、今井 泰子さん、田辺 イサノさん）
原爆詩
『げんしばくだん』（作：坂本 はつみさん）
『おとうちゃん』（作：柿田 佳子さん）
無題（作：佐藤 智子さん）
『とうとう帰ってこない』（作：徳沢 尊子さん）
『弟』（作：栗栖 英雄さん）
『ヒロシマの空』（作：林 幸子さん）



■ 寄贈図書

ヒロシマ原爆展展示後に広島平和記念資料館より寄贈を受けました。

No	書籍名	著者名	出版年	出版社
1	絵本 はだしのゲン	中沢 啓治	1980	汐文社
2	知ってくださいあの日のことを	子供たちに世界に！ 被爆の記録を贈る会	1981	子供たちに世界に！ 被爆の記録を贈る会
3	黒い雨	井伏 鱒二	1981	新潮社
4	被爆証言集 原爆被爆者は訴える	広島平和文化センター	1988	広島平和文化センター
5	伸ちゃんのさんりんしゃ	児玉 辰春 おぼ まこと	1992	童心社
6	あの日広島と長崎で	平和博物館を創る会	1994	平和のアトリエ
7	絵本 まっ黒なお弁当	児玉 辰春 長澤 靖	1995	新日本出版社
8	写真集ひろしま	広島平和文化センター	1997	広島平和文化センター
9	図録「ヒロシマを世界に」	広島平和記念資料館	1999	広島平和記念資料館
10	あるいてみよう広島 のまち	広島平和教育研究所 広島県原爆被爆 教職員の会	2000	広島県教育用品
11	おりづるの旅	うみの しほ 狩野 富美子	2003	PHP研究所
12	夕風の街 桜の国	こうの 史代	2004	双葉社
13	図録「原爆の絵」	広島平和記念資料館	2007	岩波書店

平和学習

1 『ちいちゃんのかげおくり』から学ぶ平和の大切さ

朝日ヶ丘小学校では、3年生の国語の授業で、戦時中の様子を描いた物語『ちいちゃんのかげおくり』を学びます。授業の中で戦争の悲惨さや平和の大切さについて学ぶだけでなく、ちいちゃんと同じ小学校3年生の時に市内で空襲を体験した岡田保子さんと戦争を体験した岡田龍一りょういちさんに戦時中の様子について語っていただき、戦争について学びました。

- 日 時 平成30年10月19日（金）11時40分～12時25分
- 場 所 朝日ヶ丘小学校 視聴覚室
- 証言者 岡田保子さん、岡田龍一さん

2 平和集会

精道小学校では、毎年、太平洋戦争が始まった12月8日に合わせて、平和集会を行っています。平成30年度の平和集会には、宮下清さん、岡田保子さん、岡田龍一さんをお招きし、市内での空襲体験や戦時中の様子について語っていただきました。

また、平和集会にあわせて、戦時中の資料や平和に関する本などの展示を行いました。

- 日 時 平成30年12月7日（金）8時30分～9時30分
- 場 所 精道小学校 体育館
- 証言者 宮下清さん、岡田保子さん、岡田龍一さん



(展示風景)

岡田 保子さん、岡田 龍一さんのお話

この記録は、朝日ヶ丘小学校で行われた平和学習で岡田保子さんと岡田龍一さんが話された空襲体験や戦時中の体験の内容を文章にしたものです。

保子 私の生まれ育った家は、阪神打出駅の近くにありました。空襲にあった1945年（昭和20年）の時、皆さんと一緒の3年生でした。敵がやって来るというので、空襲から逃れるために安全なところに行くこと（疎開）になりました。疎開先は今の岡山県のほうです。



（岡田保子さんのお話）

私は、宮川小学校に行っていました。3年生になると、危ないので、安全な所にお母さんや兄と別れて行くというので、着る物を用意し、下着やいろいろな物に学校と私の名前を書いてもらって、はい出発、家から分かれて行きます、と言った時に、私は、嫌だと泣いて行きませんでした。疎開に行っていたら空襲にはあわなかったのですが、行くの嫌やと言って泣いたので、お母さんも許してくれて、家にいることになりました。

しかし、学校へ行っても敵の飛行機がやってくると空襲警報や警戒警報と言ってサイレンが鳴ります。サイレンが鳴ったら学校から飛んで家へ帰ってきました。

夏休みになって、学校へ行かなくなった時に私の家は空襲にあいました。8月5日の夜でしたが、敵の飛行機がやってくると言うので、空襲警報のサイレンが鳴ると、庭に掘ってあった穴（防空壕）に家族5人が入って逃げていました。その時、父が、「出て来い」と言ったので、防空壕から出てみると、座敷や洗濯物などが燃えていました。その中をお母さんに手をつないでもらって浜のほうへ逃げました。ちょうど今の43号線、昔は旧国道と言っていました。砂の道ではなくて、アスファルトの道だったので、逃げる時にあっちこっち火が燃えていました。燃えている所を避けるようにお母さんに手をつないでもらって、浜のほうに無事に逃げることができました。

私の兄が焼けた跡を見に行ったら柱が一本も残っていなくて、お風呂だけが

ちょっと残っていましたが、あとはみんな焼けてしまっていた、行く途中の道にたくさんの人が倒れて亡くなっていたという話を聞きました。

夏休みのはじめ、打出の浜の海岸に泳ぎに行った同級生のお友達が、アメリカの飛行機に撃たれて亡くなりました。機銃掃射と言いますが、低く飛んで、人を狙って撃つ飛行機です。私のお母さんも畑から帰るときに、今の宮川幼稚園の前を歩いていたら、敵の飛行機が寄ってきて撃たれそうになりました。ちょうど屋根のある門があって、屋根の下に入ったので助かったということを知りました。

私は、『ちいちゃんのかげおくり』のように空襲にあいましたが、助かりました。家はすっかり焼けてしまいましたが、家族もみんな逃げることができました。

空襲のあと、食べる物がありませんでしたが、私の家は農家だったので、サツマイモを食べることができ、空腹を避けることができました。食べる物がなかったら、ちいちゃんのようにお腹が空いて亡くなっていたかもしれません。私の空襲体験は以上です。

先生 ちいちゃんのお父さんは戦争に行っています。保子さんの親戚の方も戦争に行ったと聞きましたが、その時のことを教えてください。

保子 空襲にあう前の話ですが、私のいとこが兵隊に行くということになり見送りに行ったことがあります。戦争に行くから悲しいのではなくて、喜んで、「頑張って行って来て下さい」と言って、見送ったことを覚えています。しかし、いとこは、戦争に行って亡くなりました。他にもたくさんの人が戦争に行って亡くなってしまいましたが、私は、お父さんや兄弟と無事に過ごすことができました。

先生 芦屋の空襲について何か聞きたいことはありますか？

児童 『ちいちゃんのかげおくり』を勉強していた時、「祝出征」というたすきがありました。何で戦争に行く時に祝うのですか？

保子 当時、戦争に行くことに対して悲しい思いは何にもありませんでした。頑張ってきてね、という思いでした。だから「祝」という言葉を使っていたのかもしれない。

先生 皆さんはこの気持ちが分かりますか。親戚のおじさんが戦争に行くことになったらどう思いますか？

児童 悲しい。

保子 悲しいでしょ。でも出征をする人を見送る時は、死んでしまうということとは考えていませんでした。勝ってくると思っていたし、悲しい思いをしたことはありませんでした。

児童 お芋1個だけで毎日過ごしていたのですか？

保子 私の家は農家だったので、お米もありました。だけど今のように白米ではなくて、麦をいっぱいお米と一緒に入れて、炊いて食べていました。だからお腹が空いて困る、ちいちゃんのように亡くなってしまうということはありませんでした。でも食べる物が無い家庭では、ちいちゃんのような思いをしながら過ごしていた人もたくさんいたと思います。

児童 防空壕はどのぐらいの深さがありますか？

保子 私が入っていた防空壕は、庭に掘っていたので、家族が5人入れるほどの深さがありました。その他にも家族だけでなく近所の人何人か入れる防空壕があったという話を聞きました。

先生 ありがとうございます。それでは次に龍一さんに戦争当時の様子についてお話していただきます。

龍一 73年前、1945年(昭和20年)は大切な年です。皆さんにとって、昔のことかもしれませんが、その時、皆さんと同じ小学校3年生でした。それまで日本は、戦争をしていましたが、何もないのに空襲にあうことはありません。



(岡田龍一さんのお話)

当時はアメリカと戦争しており、アメリカの飛行機が来て爆弾を落とすと言っていますが、その10年以上前に隣の中国と戦争していました。本格的に中国と戦争することになったのが1937年(昭和12年)7月7日、七夕の日です。中国では、今でも七夕になったら日本が攻めてきたとすごく怒っている人もいます。

私が3年生の時は、小学校ではなく、国民学校と言っていました。「君らは少国民だから大きくなったら兵隊になれ」と教えられました。「兵隊になって戦争に行ってきたさい、そしてお国のために戦ってきたさい」という教育を受けてきました。軍国主義教育と言いますが、実際には、竹やりの先を火で焦がして鋭くし、竹やりを突く練習をしました。また、藁人形わらを作って、アメリカのルーズベルト大統領とイギリスのチャーチル首相の顔を書いて突っ込んで行って、ぶすっと刺すような練習を運動会でやったりしました。皆さんにとっては考えられないようなことかもしれませんが、3年生までそのような生活を送っていました。

1945年(昭和20年)になってから、至る所で空襲が起き、日本中が大変なことになりました。それまでアメリカは自分の国からB29だけ飛んでき

て、爆弾を落とすことはできませんでした。だから途中の島を占領して、その島から爆弾を搭載した飛行機を飛ばしました。

空襲の中で一番激しかったのは、3月10日の東京大空襲です。辺り一面火の海になってしまって、10万人もの人が亡くなりました。8月6日に広島に原爆が落ちて約14万人、8月9日に長崎にも原爆が落ちて約7万人の人が亡くなりました。そして、8月15日、日本は戦争に負けたと言って降伏しました。

最後に大切な話をします。それは、命の大切さです。今は皆さん命を粗末にしてはいけないと言っていますが、それだけでは駄目です。お父さん、お母さんがいるからこの場にいるということを忘れてはいけません。そしておじいちゃんやおばあちゃんが生き延びたから皆さんはこの場にいます。その命を皆さんがつかないでいかないといけません。

私は、「死んでこい、死んできます」と言って教育されてきました。でも皆さんは違います。命を大切にしていくなために、二度と戦争を起こしたらいけません。戦争なんか起こしたら一瞬で多くの人が死んでしまいます。何も関係ない人が死んでしまいます。戦争は絶対に駄目です。戦争は駄目だということを伝えていける人間になってほしいと思います。



宮下 清さんのお話

この記録は、精道小学校で行った平和集会で宮下清さんが話された空襲体験の内容を文章にしたものです。

宮下 私が小学校6年生の時、1941年（昭和16年）12月8日、学校へ行くと、子ども同士で「アメリカと戦争が始まったらしい」と話をしていました。そうしたら校長先生が、「今日はアメリカと戦争が始まったから日本が勝つようにお宮さんへ祈りに行こう」と言って、打出神社へ行って日本が勝つように祈りに行ったことを覚えています。



（宮下清さんのお話）

中学校では1年生、2年生と勉強をしましたが、3年生になった時、男の人がみんな兵隊に行ってしまうと、工場へ行く人がいなくなりました。それで、中学校から工場へ働きに行くことになって、毎日旋盤を使って仕事をしていました。

昭和20年8月5日の夜中、私達は、空襲警報が鳴ったので、防空壕へ入ったのですが、頭の上にアメリカの飛行機が飛んできた時は、シュシュシューという音がして、形は八角形で直径10cm、長さが70cmぐらいの焼夷弾^{※1}がたくさん落ちてきました。どーんと落ちた拍子に、火が付いた油が畳、ふすま、天井、地面、洗濯物などに花火のように飛び散って、見ている間に家が燃えだしたので、慌てて今の宮川小学校の前を通過して浜の方へ逃げました。

当時の家は、今みたいに鉄筋の家、マンションは一軒もなく、ほとんど2階建ての木造の家だったので、火がつくと一気に燃えだします。

火が消えて、焼け跡へ行くと、柱は一本もなく、焼けた瓦だけが周囲に転がっていて、コップが溶けてしまって丸くなっていたことを思い出します。

戦争は本当に怖いということをみなさんに知っていただきたいと思います。

※1 焼夷弾（しょういだん）…家屋・物資の焼き払いや火災による人員殺傷を目的とした、焼夷剤が入った爆弾。

平成30年度「小学生の描いた平和ポスター展」受賞作品

市長賞



朝日ヶ丘小学校 5年 松村 耕太郎さん

広島平和記念資料館長賞



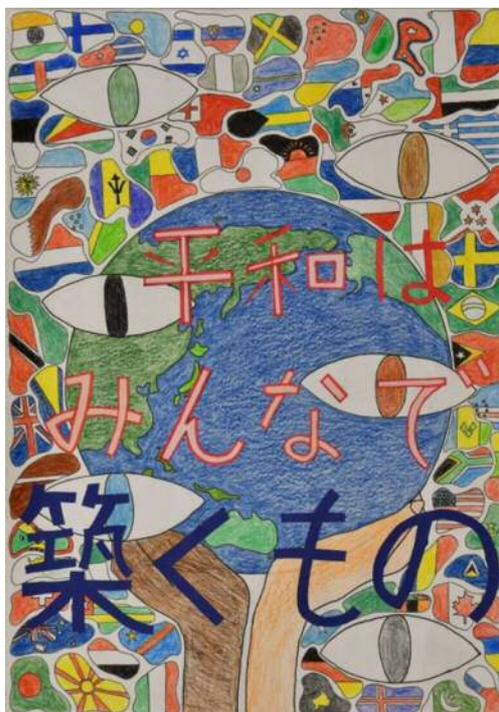
山手小学校 4年 永野 ももりさん

議長賞



宮川小学校 6年 真野 愛理さん

教育長賞



朝日ヶ丘小学校 6年 小西 明来さん

優 秀 賞



打出浜小学校 6年 松尾 莉緒さん



潮見小学校 6年 辻 智貴さん

優 秀 賞



浜風小学校 5年 浅井 優里さん



精道小学校 2年 山本 寛也さん

努力賞



打出浜小学校 6年 野上 真理子さん



朝日ヶ丘小学校 6年 寺岡 光結さん



打出浜小学校 6年 日出谷 咲羽さん

努力賞



岩園小学校 6年 廣橋 さやさん



精道小学校 5年 田中 理愛さん



宮川小学校 4年 吉田 麻里子さん

被爆樹木アオギリ二世

核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を願い、平和首長会議からいただき、平成29年5月に市役所東館北側緑地に植樹した被爆樹木「アオギリ」の苗木は、すくすくと成長を続けています。市民の皆さまの平和への願いがさらに大きなものとなるよう、ホームページを通して、この1年の成長をお伝えしました。

◆被爆樹木アオギリ◆

被爆樹木アオギリ二世の親木であるアオギリ一世は、爆心地から1,300メートルの距離にある旧広島通信局の中庭で被爆しました。爆心地側の幹半分が焼けてえぐられていましたが、焦土の中で青々と芽を吹き返し、広島市民に勇気と希望を与えました。平和記念公園に移植された今も成長を続け、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を訴え掛けています。



平成29年5月2日 精道幼稚園児による植樹



平成30年4月



平成30年9月



平成31年2月 新芽が見えます

平成30年度「たゆまぬ平和への歩み」展

戦後70年以上が経ち、戦争を知らない世代へ戦争の悲惨さと平和の尊さを語り継いでいくため、平成29年度から開催している「たゆまぬ平和への歩み」展を、今年度も3回にわたって開催しました。

第1回「たゆまぬ平和への歩み」展

芦屋市が初めて空襲を受けた5月11日にあわせて開催しました。

- 期間 平成30年5月1日（火）～5月31日（木）
- 場所 市役所北館1階 展示コーナー、ロビー
- 内容 「大阪空襲・市民生活」パネルの展示
（ピースおおさか 大阪国際平和センター所蔵）
芦屋市所有及び市民寄贈資料展示

○「大阪空襲・市民生活」パネルの展示、戦時中の写真



○市民所有及び市民寄贈資料



第2回「たゆまぬ平和への歩み」展

戦争・被爆体験を忘れることなく後世へと語り継ぎ、平和の大切さを改めて考える機会として開催しました。

- 期間 平成30年7月12日（木）～8月31日（金）
- 場所 市役所北館1階 展示コーナー
- 内容 平和首長会議の「ヒロシマ・ナガサキ被爆の実相等に関するポスター」展示
芦屋市所有及び市民寄贈資料展示
平和に関する絵本の展示と読み聞かせ
（NPO法人「絵本で子育てセンター」の絵本講師）
※展示絵本一覧はP41～P47

○ヒロシマ・ナガサキ被爆の実相等に関するポスター展



○絵本展示



○絵本の読み聞かせ



第3回「たゆまぬ平和への歩み」展

1985年（昭和60年）10月15日に芦屋市議会が非核平和都市宣言を決議したことにちなみ、10月に開催しました。

- 期間 平成30年10月1日（月）～10月31日（水）
- 場所 市役所北館1階 展示コーナー
- 内容 ヒロシマ原爆展資料展示

○ヒロシマ原爆展展示資料



○小学生の描いた平和ポスター展受賞作品



○広島平和記念資料館寄贈図書



○非核平和都市宣言に関する資料



■ 平和に関する展示絵本一覧

No.の数字に○印がついているものは、芦屋市立図書館で借りることができます。

(平成31年3月現在)

【幼児から】

No.	書名	著者名1	著者名2	出版年	出版社
①	はなのすきなうし	マンロー・リーフ	ロバート・ローソン	1954	岩波書店
②	せかいのひとびと	ピーター・スピーアー	—	1982	評論社
③	日本のお米	和久井 晶代	梅田 俊作	1983	PHP研究所
④	土のふえ	今西 祐行	沢田 としき	1998	岩崎書店
⑤	となりのイカン	中山 千夏	長谷川 義史	2004	河出書房新社
6	いのちのまつり「ヌチヌグスージ」	草場 一壽	平安座 資尚	2004	サンマーク出版
⑦	せかいでいちばんつよい国	デビッド・マッキー	—	2005	光村教育図書
⑧	ぼくがラーメンたべるとき	長谷川 義史	—	2007	教育画劇
⑨	ムツとわたし	大和田 啓子	郡司 みはる	2007	「ムツとわたし」を読む会
10	つながってる！「いのちのまつり」	草場 一壽	平安座 資尚	2007	サンマーク出版
11	おかげさま「いのちのまつり」	草場 一壽	平安座 資尚	2010	サンマーク出版
⑫	へいわってどんなこと？	浜田 桂子	—	2011	童心社
⑬	へいわってすてきだね	安里 有生	長谷川 義史	2014	ブロンズ新社
⑭	おーい、ふじさん！	大山 行男	—	2014	クレヴィス
15	すばらしいみんな WHAT A WONDERFUL WORLD	ボブ・シール& ジョージ・D・ ワイス	ティム・ ホプグッド	2014	岩崎書店
⑯	おかあさんのいのり	武鹿 悦子	江頭 路子	2015	岩崎書店
⑰	せんそうしない	たにかわ しゅんたろう	えがしら みちこ	2015	講談社

No.	書名	著者名1	著者名2	出版年	出版社
⑱	まるいものの なかに	藤 真知子	荒井 真紀	2016	ポプラ社
19	だれのこどもも ころ させない	西郷 南海子	浜田 桂子	2017	かもがわ出版
⑳	てをつなぐ	鈴木 まもる	—	2017	金の星社

【低学年から】

No.	書名	著者名1	著者名2	出版年	出版社
①	六にんの男たち—なぜ 戦争をするのか？	デビッド・マッキー	—	1975	偕成社
②	あいうえおの き ちからをあわせたもじ たちのはなし	レオ=レオニ	—	1978	好学社
③	まちんと	松谷 みよ子	司 修	1978	偕成社
④	ひろしまのピカ	丸木 俊	—	1980	小峰書店
⑤	トビウオの ぼうやは びょうきです	いぬい とみこ	津田 櫓冬	1982	金の星社
⑥	やさしい木曾馬	庄野 英二	斉藤 博之	1983	偕成社
⑦	どっきり!! ばけくら べ	二俣 英五郎	—	1985	ポプラ社
⑧	まるいちきゅうのまる いちにち ALL IN A DAY	安野 光雅	—	1986	童話屋
⑨	大砲のなかのアヒル	ジョイ・コウレイ	ロビン・ベルトン	1990	平和のアトリエ
⑩	すみれ島	今西 祐行	松永 禎郎	1991	偕成社
⑪	せかいいち うつくし い ぼくの村	小林 豊	—	1995	ポプラ社
⑫	お手玉いくつ	長崎 源之助	山中 冬児	1996	教育画劇
⑬	サルビルサ	スズキ コージ	—	1996	架空社
⑭	ぼくの村に サーカス がきた	小林 豊	—	1996	ポプラ社

No.	書名	著者名1	著者名2	出版年	出版社
⑮	みんなのベロニカ	ロジャー・ デュボアザン	—	1997	童話館出版
⑯	0じいさんのチェロ	ジェーン・カトラー	グレッグ・コーチ	2001	あかね書房
⑰	ななしのごんべさん	田島 征彦	吉村 敬子	2003	童心社
⑱	ひでちゃんとよばないで	おぼ まこと	—	2003	小峰書店
⑲	せかいいち うつくしい村へ かえる	小林 豊	—	2003	ポプラ社
㉑	がんこな天狗どん	毛利 まさみち	—	2008	汐文社
㉒	ひらがなにつき	若一の絵本制作 実行委員会	長野 ヒデ子	2008	解放出版社
㉓	ともだちのしるしだよ	カレン・リン・ ウィリアムズ カードラ・ モハメッド	ダーグ・チャーカ	2009	岩崎書店
㉔	ブルンディバール	トニー・クシュナー	モーリス・ センダック	2009	徳間書店
㉕	おとうさんの地図	ユリ・ シュルヴィッツ	—	2009	あすなろ書房
㉖	ランドセルは海を越えて	内堀 タケシ	—	2009	ポプラ社
㉗	ワンガリの平和の木	ジャネット・ ウィンター	—	2010	B L出版
㉘	キンコンカンせんそう	ジャンニ・ロダーリ	ペフ	2010	講談社
㉙	語り継ぐ戦争絵本シリーズ⑦ シベリア抑留氷海のクロ	神津 良子	北野 美子	2010	郷土出版社
㉚	笑顔大好き 地球の子	田沼 武能	—	2010	新日本出版社
㉛	ゆうかなうレクランシー	ラチ・ヒューム	—	2011	小学館
31	京劇がきえた日	姚 紅	—	2011	童心社
32	非武装地帯に春がくると	イ・オクベ	—	2011	童心社
㉜	青い空	柳生 研太郎	—	2011	風詠社

No.	書名	著者名1	著者名2	出版年	出版社
③④	おはなし しましろう	谷川 俊太郎	元永 定正	2011	福音館書店
③⑤	ぼくのこえがきこえますか	田島 征三	—	2012	童心社
③⑥	くつがいく	和歌山 静子	—	2013	童心社
③⑦	さくら	田畑 精一	—	2013	童心社
③⑧	白い街 あったかい雪	鎌田 實	小林 豊	2013	ポプラ社
③⑨	おじいさんとヤマガラ 3月11日のあとで	鈴木 まもる	—	2013	小学館
④⑩	ほうれんそうは ない ています	鎌田 實	長谷川 義史	2014	ポプラ社
④⑪	世界でいちばん貧しい 大統領のスピーチ	くさば よしみ	中川 学	2014	汐文社
④⑫	マララさん こんにちは は 世界でいちばん勇 敢な少女へ	ローズマリー・ マカーニー	—	2014	西村書店
④⑬	そらいろ男爵	ジル・ボム	ティエリー・ デデュー	2015	主婦の友社
④⑭	戦争と平和を見つめる 絵本 わたしの「やめ て」	自由と平和のための 京大有志の会	塚本 やすし	2015	朝日新聞出版
④⑮	タケノコごはん	大島 渚	伊藤 秀男	2015	ポプラ社
46	いのる	長倉 洋海	—	2016	アリス館
④⑰	とうきび	クオン・ジョンセン	キム・ファンヨン	2016	童心社
④⑱	世界のあいさつことば 学	稲葉 茂勝	—	2016	今人舎
④⑲	ドームがたり	アーサー・ビナード	スズキ コージ	2017	玉川大学出版部
⑤⑰	まなぶ	長倉 洋海	—	2018	アリス館
⑤⑱	はたらく	長倉 洋海	—	2018	アリス館
52	いっしょにおいでよ	ホリー・M・マギー	パスカル・ ルメートル	2018	廣済堂あかつき

【高学年から】

No.	書名	著者名1	著者名2	出版年	出版社
①	わたしがちいさかった ときに	長田 新	岩崎 ちひろ	1967	童心社
②	ふたつの島	イエルク・ シュタイナー	イエルク・ ミュラー	1982	ほるぷ出版
③	トミーが三歳になった 日	ミース・バウハウス	ベジュリフ・ フリッタ	1982	ほるぷ出版
④	おとなになれなかった 弟たちに…	米倉 斉加年	—	1983	偕成社
⑤	わすれないで 第五福 竜丸ものがたり	赤坂 三好	—	1989	金の星社
⑥	絵で読む 広島原爆	那須 正幹	西村 繁男	1995	福音館書店
7	戦争で死んだ兵士のこ と	小泉 吉宏	—	1997	ベネッセ
⑧	バラのぜんゆうさん —ゆめ追う反戦地主—	芝 憲子	大城 節子	1998	汐文社
⑨	風が吹くとき	レイモンド・ ブリックス	—	1998	あすなろ書房
⑩	なぜ あらそうの？	ニコライ・ポポフ	—	2000	BL 出版
11	イチローへの手紙	ジーン・D・ オキモト	ダク・キース	2003	河出書房新社
⑫	エリカ 奇跡のいのち	ルース・ バンダー・ジー	ロベルト・ インノチェンティ	2004	講談社
⑬	絵本 アンネ・フラン ク	ジョゼフィーヌ・ プール	アンジェラ・ バレット	2005	あすなろ書房
⑭	バスラの図書館員 イ ラクで本当にあった話	ジャネット・ ウィンター	—	2006	晶文社
⑮	ここが家だ ベン・シ ャーンの第五福竜丸	アーサー・ピナード	ベン・シャーン	2006	集英社
⑯	いわたくんちのおばあ ちゃん	天野 夏美	はまの ゆか	2006	主婦の友社
⑰	もくれんの花 語り継 ぐ戦争絵本シリーズ4	神津 良子	池田 勝子	2007	郷土出版社
⑱	なぜ戦争はよくないか	アリス・ウォーカー	ステファノ・ ヴィタール	2008	偕成社
⑲	ながいながい旅 エス トニアからのがれた少 女	ローセ・ ラーゲルクラント	イロン・ ヴィークランド	2008	岩波書店

No.	書名	著者名1	著者名2	出版年	出版社
⑳	やめて!	デイビット・マクフェイル	—	2009	徳間書店
㉑	ちいさな へいたい	パウル・ヴェルレプト	—	2009	朔北社
㉒	少年の木 希望のものがたり	マイケル・フォアマン	—	2009	岩崎書店
㉓	かあさんをまつふゆ	ジャクリーン・ウッドソン	E・B・ルイス	2009	光村教育図書
24	きぼう こころひろくとき	ローレン・トンプソン	—	2009	ほるぷ出版
25	ぬすみ聞き 運命に耳を澄まして	グロリア・ウィーラン	マイク・ベニー	2010	光村教育図書
㉔	ピートのスケートレース 第2次世界大戦下のオランダで	ルイス・ボーデン	ニキ・ダリー	2011	福音館書店
㉕	そのこ	谷川 俊太郎	塚本 やすし	2011	晶文社
㉖	おもいだしてください あの子どもたちを	チャナ・バイヤーズ・アベルス	—	2012	汐文社
㉗	さがしています	アーサー・ビナード	岡倉 禎志	2012	童心社
㉘	カーリーナのりんご チェルノブイリの森	今関 あきよし	堀切 リエ	2012	子どもの未来社
31	はしるってなに	和合 亮一	きむら ゆういち	2013	芸術新聞社
㉙	かあさんは どこ?	クロード・K・デュボワ	—	2013	ブロンズ新社
㉚	火城 燃える町-1938	蔡 皋	鞠 子	2014	童心社
㉛	ふるさとかえりたい リミヨおばあちゃんとヒバクの島	羽生田 有紀	島田 興生	2014	子どもの未来社
㉜	むのたけじ 100歳のジャーナリストからきみへ学ぶ/平和/生きる/育つ/人類(全5冊)	むの たけじ/ 菅 聖子	—	2015	汐文社
㉝	わすれたって、いいんだよ	上條 さなえ	たるいし まこ	2015	光村教育図書
㉞	つきよのたけとんぼ	梅田 俊作	—	2016	新日本出版社

No.	書名	著者名1	著者名2	出版年	出版社
③⑧	父さんたちが生きた日々	岑 龍	—	2016	童心社
③⑨	これから戦場に向かいます	山本 美香	佐藤 和孝	2016	ポプラ社
④⑩	平和ってどんなこと？	ウォーレス・エドワーズ	—	2017	六耀社
④①	この本をかくして	マーガレット・ワイルド	フレヤ・ブラックウッド	2017	岩崎書店
④②	春姫という名前の赤ちゃん	ピョン・キジャ	チョン・スンガク	2017	童心社
43	花ばあば	クォン・ユンドク	—	2018	ころから

